

ALAÏA (3F)

ビュアであり続けるため、 ローマテリアルに思いを託す

建築のなかに生まれたもう一つの建築とも形容すべきか、アーティシーな空間が並ぶGINZA SIXの3Fに生まれた[ALAÏA(アライア)]のブティックは、鉄骨やモルタルといった重厚感ある素材づくいで裏打ちを放つ、設計はアライアの創設者であるアズディン・アライアと細交のあった建築家のソフィー・ヒックス。そのデザインを知るには、アズディンとヒックスの歴史を紐解く必要がある。

アズディン・アライアは「キング・オブ・クリング」の名で呼ばれたウチュール界の天才だ。クリング(まどわりつく)と表現されたように、ボディラインを



ショップファワードは鉄骨によるフォルム、モルタルと漆喰によって構成される。ヒックスは鉄骨を好まないが、頑重となる3次元空間はアズディン・アライアのイコニクである4へのイメージでもある。素材はいづれも染色せず、土の色を使う。ビュアの素材にはキャラクターがあり、タイムレスだとヒックスは思い。



Profile: SOPHIE HICKS

1960年生まれ。日本でファッション雑誌『Harper's B Queen』のチーフ編集者でスタイリストとして仕事を始める。10年におおむねファッションデザイナーを務め、アズディン・アライアの専属編集『AA』でスタイリングを担当。1988年にAAスクールで建築を学び、1994年に立派建築家となり、多岐にわたる建築に関わる。

美しく見えるコンシヤスなドレスで彼を知る人も少なくないだろう。「女性の第2の肌」とも言われるほど多くの女性を纏にした彼の本質は、彫刻的なフォルムにあり、それを支えるカッティングと縫製の技術にある。彼は2017年に退去したが、2021年にピーター・ミュリエがクリエイティブディレクターに就任。アズディンから継承したタイムレスな美しさ、大胆でいて繊細なフォルムでメゾンは次の歴史をたどり始めた。

一方ヒックスはひたすら、老練ファッション雑誌がティーンエイジャーに向けた特別号のゲスト編集者として仕事を始めた人物だ。高校卒業後も『Tate』『British Vogue』などのファッション誌でエディターとして働き、写真家のピーター・リンドバークやバボロ・ロベルシ、アーサー・エルゴートやブルース・ウェーバーらと仕事を重ねた。1986年、彼女は雑誌の世界からアズディンのもとへ移り、2年間にわたって彼の作品集制作に携わる。その後、彼女は幼少期からの夢だった建築家の道を目指した。ヒックスは、空間のルーツにパリ・マレ地区にあるアズディンのアトリエを挙げる。それは鉄骨がガラス屋根を支える19世紀の建築だ。GINZA SIXでもショップフロントには鉄骨。そしてコンクリートと混せるセメントと漆喰を使う。いづれも建物の外装材に使われることが多いペーシングな素材だとヒックスは思い、「アズディンは本物の素材に強い要求を持っていました」と語る。



ピーター・ミュリエによる2度目のコレクションで発表された、ネイビーカラーのマキシサイズのフルキャパコート。ボリュームのあるカラーと2サイドポケットがアクセントとなる。上部にボリュームも、下部にタイトなフィットをもち、美しく精緻なアライアらしい一着。¥64,700 / アライア [3F]

「彼が好んだのは力強い素材です。そしてピーターもまた、アズディンと同じスピリットをもつデザイナー。彼は、アズディンと同じアトリエでスタッフがともに伝統的な技術も使いながらクリエイションに没頭しています」と語る。また、ピーターからは建築のディテールを撮影した写真を見せながらミニマルな空間を求められたという。

「美のところ、私はミニマリズムが好きではありません。しかし彼が求めるものが、シンプル、ストレート、モダンであると解釈しました。そして同時に彼は、とても面白いことを求めました。ショップを訪れるゲストには普段と違う振る舞いをしてほしい。そこで私たちはフィッティングエリアを広く設け、ゲストにいつもと違う行動をとってもらうこと。そしてそのためのサービスを提供することを決めたのです。ゲスト自らフィッティングで衣服を研究すること。それが私たちの出した答えです。スタッフが服を集めてフィッティングエリアに運び、ゲストは自分のために用意されたレールから服を順番に試着し、服を試します」

壁とライトボックスが半円形に並べられたフィッティングエリアは、中央に回転する鏡があり、荷はもろろん、後ろ姿まで見ることができる。この空間はウチュールフィッティングのエスプリを昇えたものだヒックスは語る。

「アライアは非常に高いレベルをもつウチュールです。ですからそれを感じてもらい空間をも重視しました。この半円形のフィッティングエリアは、ブティックの43程度を占めるんです」

ヒックスはさらにフィッティングの間に防音遮音材を用いたことに気づいただろうかと問いつける。塗料本来の色をそのまま用いた壁はわずかに色と色が異なる。真鍮部や真鍮のブティックから漏れる音を封入、安らいで静に向き合う時間を作る。彼女は、「次はぜひフィッティングエリアで声を出してみよう。遠いかならずだから」と笑む。

建物はなく歴史を穿つからこそ美しい。そのためビュアであり続け、結果個性が宿る。美のために精神であり続ける。それこそがアズディンの時代から続くアライアの信念なのだ。



Iconic Items

黒/白のピーターによる黒色のハードシェイプのレザーバッグは、彼の愛用するビュアフォルムで鉄骨、カラーも黒でアイコニックに美しくも、"カー"と"ス" ¥23,200 - ¥64,900 - ¥125,200 / ロック型押しアライアの"AA"をあしらったこのハードシェイプのレザーバッグは、黒/白/アイボリー / ¥23,200 / アライア [3F]